第七章　高松宮、髯の両大人の流域視察

1　髯（ひげ）の両大人

木曽川の下流用水の水利権

昭和二十三年暮れには、農林省開拓局への陳情から、はからずも、吉田総理に直接陳情することができ、事業の行く先に光が見えてきた。そこで、昭和二十四年、年が明けるとさっそく農林省、総理府にお礼に上がった。

そこで、山崎先生、伊藤佐局長より紹介を受けて、元農林大臣石黒忠篤先生[註1]にお会いすることができた。久野さんは石黒先生より、愛知用水建設について激励を受け、「この本は、用水造りには参考になるよ」と『T・V・A　民主主義は進展する』（リリエンソール著）という本を贈られた。読んでみて感激して、明壁と私にも読ませた。

愛知用水が単なる農業用水に終わらずに、人間の命の水＝飲料水、経済発展のための工業用水、地域の環境保全など、自然、生態、経済に役立つことを知り、自信をもって努力する勇気が湧いてきた。

木曽川の水を使って、生業を営むものには、古く農業用水があった。そのほか、上工業用水があった。農業用水においては古く、御三家の一つ尾張徳川が封ぜられるや、当時、木曽川は犬山から下流は他流域とも重なって、尾張平野を五本となって乱流していた。そこで、これを治めるのに、犬山から下流に向かって美濃、高須の方向に向けて大堤防を築き、美濃側の堤防より三尺高く築堤し、洪水が出れば必ず美濃側に切れ込み尾張側を守った。これを御囲堤といって、犬山に附家老成瀬隼人守を置き、木曽川の犬山渡河点とともに監視させ、木津用水、入鹿池を建設、戦後不要となった駄馬人足を入植させた。山川ともに御拝領し、強権を振りまわした。また、木曽川からの取水は、「イノコ」（第四章の註参照）と称する木の枠を組みそれに粗朶（そだ）、割り石などを置く導流提を造り取水していた。

これは出水のたびごとに流され、年々春先には裸になってこれを新設し、洪水のたびに補修新設をしなければならなかった。また、木曽川上流には大正・昭和とダムの発電所が新設され、下流への土砂の流出が少なくなり、洪水のたびにスコールを受けて河床が低下し、イノコの新設、補修に苦労していた。そこへ、愛知用水が上流取水するという情報が、新聞その他報道機関から流れてきたため、県、農林省等の動きが見えてきて、「愛知用水の木曽川上流取水絶対反対」の陳情が、木曽川下流取水用水関係者から県、農林省に殺到してきた。

山崎先生の大秘策

山崎先生は、木曽川から取水して知多半島に用水を作る可能性は技術的には、県、農林省の当局者の意見を聞いて心配はないと判断されていたが、木曽川下流の農業用水利用者の絶対反対には非常に心配されて、当時の木曽川下流の研農会員、大口村の丹羽甚作を呼んで、

木曽川下流の農業用水利用者のことも知っておかねば、と久野さんと二人で調査して歩いた。木曽三川神社にて。左端・久野、右端・浜島（昭和23年暮れ）

木曽川下流取水の用水組合の幹部と久野庄太郎さんの話し合いの席を設けて話し合わせたのが、前述の犬山紅葉館の会合であった。そして、話し合いは火に油を注いだような結果になった。

このまま、愛知用水計画を進めれば、農民同士の水喧嘩となってしまう。何とか方法はないものかと思案の結果、いよいよ時期も迫ってきたので、農林省の大権威者、元農林大臣二回の経歴のある親友石黒忠篤氏に相談すべく上京した。石黒氏はすでに、伊藤佐、平川守などから事情を聞いており、さっそく平川守農地局長を呼び、木曽川下流用水の愛知用水の上流取水絶対反対の対策を検討させた。

その結果、木曽川下流の取水用水の反対は、木曽川の河床低下による取水困難が原因であるゆえ、現在の「イノコ」導流堤取水方式に換えて恒久的合口取水堰堤を犬山と馬飼付近に二カ所建設、各用水が現在よりも高位部取水できるように、合口取水設備すれば解消するという結論で、愛知用水が上流取水すると否とに関係なく、実施すべき事業であるということになった。

具体的には、犬山城付近で、木津、宮田、羽島用水、名古屋上水道。

木曽川下流湾曲点。馬飼付近で佐屋川、筏川、名古屋上水道その他用水統合して合口取水できる恒久的取水堰堤を造るべきだとの結論となった。

このことが、それとなく木曽川下流取水用水関係者に伝わり、それができ、下流用水が安全確実に取水できれば、愛知用水が上流にダムを新設、その放水量のみの取水と、木曽川の豊水時の取水ならばあえて反対しないという態度となった。参考のために、その当時の木曽

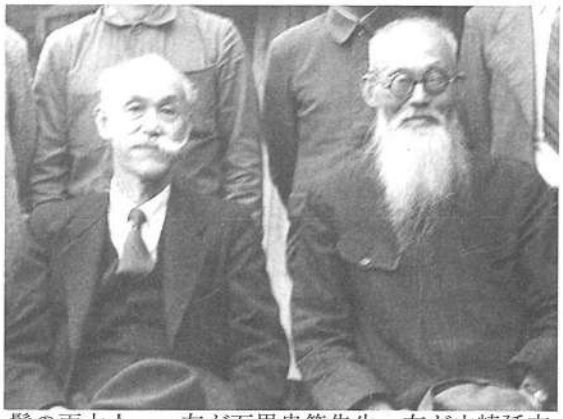
川の犬山から下流の水利権者と鵜沼地点における流況をまとめた。

髯の両大人、木曽川上下流、愛知用水地区を歩く

かくして、山崎先生の大秘策が実を結んできたので、木曽川下流の用水地を含めて髯の両大人（山崎、石黒忠篤の両先生）が現地視察されることになった。いずれの方も長い間、日本農業の片や政界に、片や教育界につくされ、偉大なる功績を積み上げられた両大人の視察は行く先々で歓迎を受けた。また、陰ながら木曽川下流の用水の取水の合理化のためにお働き下さったことを知って、木曽川下流の用水地域の人々が心から歓迎申し上げた。

山崎先生は安城農林学校の校長として多年愛知県の人材養成に尽力されたので、愛知用水の受益地帯はもちろん、木曽川下流用水地域にも、岐阜県にも有力な教え子が散在していた。それらの人を訪ねて、木曽川下流から岐阜県へと高松宮殿下を御案内するコースを考えて、石黒先生を案内し、岐阜県では木村總平、愛知県内に入ってからは瀬戸の水谷剣治の世話で、赤津の作陶家で十四代続いている加藤作助家の紹介を受けた。「もし高松宮殿下が御来名の節には、御宿泊の光栄に浴すれば、そんな名誉なことはありません」との作助家の言葉に宿舎をお願いして、愛知用水の受益地を南下。豊明村では相羽順松の歓迎を受け名古屋泊。

翌日は知多半島を南下。半田では武豊の中川益平副会長と昼食。どこに行っても山崎先生の教え子がお迎えするので、石黒先生もこの上なくお喜びになり、いよいよ知多半島の南端、師崎（もろざき）に到着、師崎町の名物助役山岡藤市の案内で細い漁師町の路地を通り、浜の井戸に到着した時は、毎日水汲みに出るお婆さん、中年の嫁さん、子供がぞろぞろと数十人、浜の井戸の水汲み縄釣瓶（なわつるべ）で水を汲んで桶で担って行く動作をご覧に入れた。お二人とも感激の面持ち。


髯の両大人――左が石黒忠篤先生、右が山崎延吉先生。お二人とも見事な髯である

そうしたら、山崎先生の胸まで豊かに垂れた立派なお髯を見た子供が指差して、「魔法使い」「魔法使い」とはしゃいだ。間髪を入れず、立派なカイゼル髯の石黒先生が、「今に見ろ。この魔法使いのお爺さんが魔法を使って、木曽川から美しい水を持って来てくれるぞ」と言われた。

その時、何とも知れぬ感激の波が走った。本当だ、あれから十年。師崎の街のどこに行っても、蛇口を捻れば、木曽の清流がほとばしり出る。さらに、夢にも思わなかった、篠島（しのじま）・日間賀島（ひまかじま）・三河の一色町の佐久島（さくのしま）まで、用水の恩恵を受けぬところなし。まさに「両髯の大人、ありがとうございました」である。

これで両大人も、すっかり自信を得て、ぜひ高松宮殿下を御案内することにした。

2　二つの審議会と東大東畑教授の視察

昭和二十五年二月二十日、国土総合開発審議会木曽川部会が日本銀行において開催され、農林省より荷見安ほか関係者多数参加。同審議会において愛知用水計画を「木曽特定地域」に編入された。

続いて同年三月八日、日本クラブにおいて、愛知用水開発審議会が開かれた。審議会委員長・安芸皎一、農林省雨森建設部長、和田計画部長、伊藤繁松資源課長、堀田地質官、建設

省小沢久太郎建設部長、経済安定本部太田更一など参加。
四月三日、東京大学東畑精一教授、愛知用水地区視察。

3　森信蔵半田市長、世銀に橋渡し

森半田市長は、若くして渡米、アメリカの大学を卒業、日本語新聞のジャーナリストとして名声を博していたが、日米間の国交が不安となり帰国、戦後、半田市長として日米間の国交回復で活躍。昭和二十五年五月五日、日本の市町村長の米国視察団の団長として渡米することになり、世界銀行副総裁ガーナーとは知己の仲、「愛知用水の趣旨と理想」（英訳）と同付図をガーナーに会って直接手渡し、借款を依頼した。

4　高松宮の愛知用水地域御視察

久野さんについては、昭和十一年父親久野彦松とともに親子優秀農家として有栖川宮より「農業功労章」受章の栄誉を得て、高松宮殿下（有栖川宮家を継承された）の久野家農場の御視察をいただき光栄に浴したことがあり、二重の光栄をいただいたことになるわけである。このたびは、山崎延吉、石黒忠篤、両大人の話で、「よし、それでは、私が木曽川下流の人や受益地域の人達によく話してやろう」と昭和二十五年七月十二日より四泊五日のご予定でお出かけいただいたわけである。

戦後、日なお浅く、皇室に対する県の対応はむずかしく、愛知県、岐阜県とも知事は顔は

出さず。御車を提供申し上げるということで、愛知県としては、木曽川下流の問題もあり、愛知用水側に力を入れることもできず、青柳知事も立場に困ったようである。

下流農民への爽やかな説得

第一日、昭和二十五年七月十二日十二時三十分、名古屋駅御到着。貴賓室にて山崎先生が御迎えの言葉を申し上げ、久野庄太郎と浜島辰雄を紹介、愛知県知事さし廻しの車にて、宮田用水の取り入れ口、草井に向かった。車には高松宮殿下、山崎先生、助手席に浜島辰雄が座って御案内、国道一号線を走った。

当時は国道一号線といえども砂利道で未舗装であった。稲沢を出た付近で前車輪がパンクしてしまった。タイヤのスペアはない。先行の久野さんは先に行ってしまった。もちろん、当時冷房車でない。七月半ばの午後二時頃、殿下の額から汗が滲んできた。困った。その時、後から毎日新聞社の車が来て、「どうしたんですか。パンク？　この車に乗り換えませんか」。やれやれと思って殿下の顔を見ると、にこにこして、「さあ乗り換えよう」と言われて、さっさと乗り換えられる。地獄で仏とはこのことか。後の席に殿下、山崎先生、前の助手席に記者君と私。今まで横に置いていた殿下のトランクが邪魔になる。記者君がトランクをひっくり返して、ここに腰をかけろと私に言う。見ると「宣仁親王」とラベルが張ってある。

軍隊時代のくせか、私が躊躇（ちゅうちょ）していると、記者君が「遠慮いりませんよ」と再び促した。まだうろうろして膝の上に乗せて車は走り出した。その時、「遠慮しないのは君達だけだよ」と山崎先生が言われると、一同わっと笑いが起こった。車の中に一陣の涼風が起こった。

爽やかな会話のうちに草井の取り入れ口に到着した。暑いのによよそ一、五〇〇人の集まりで、殿下歓迎のどよめきが上がる。

まず木津用水の普通水利組合管理者林栄一郎が歓迎の詞（ことば）を申し上げ、井上議長、社本事務委員など、かわるがわるに歓迎の詞と木曽川から取水の困難について申し上げた。（当時の詳

（上）高松宮の車を出迎える農民たち
（下）視察をされる高松宮

細の模様は後述す）

(1) 木曽川上流に多数の発電所建設以来、下流では水位の昇降甚だしく、そのため用水の引き入れに困難していること。

(2) 木曽川本流の河床著しく低下、導水堤先端付近で十年来、約一メートル三〇センチ低下し用水の取り入れに支障があり、導流堤の先端に臨時のイノコを敷設しなければならなくなったこと。

(3) 洪水の際は水の増減が急激となり、杁（いり）前取水設備に苦労すること。

(4) 洪水時には、降雨量に比して流量が以前より多くなったこと、これは上流の乱伐の関係もあるが、発電所の堰堤ゲートの操作に起因することが大きい。

(5) 当組合現下の要望は、導水堰堤付近の本川河床に相当の床固めの工事をして、水位を高め、なお対岸上流にある利水設備の復興工事をして用水引用を便利にすること。

(6) 愛知用水の新設は、われわれ下流利水者が古くから持つ既得の権益を害しない確固たる実証あれば、あえて反対いたしませんと答えた。

右のように林栄一郎氏らが述べた後、殿下から「時に久野君が、上流で愛知用水を取水したいと言っているが、どうか」と御下問があった。そのとき林栄一郎管理者は、「愛知用水は上流にダムを作り、その水を落として利用すると言っているから、私達の水利用に支障がなければ、あえて反対は致しません」と明快なお答えをした。それに対して殿下は「木曽川からの取水に困難を来たすようなれば、安全確実な取水ができるような施設を建設することを関係の役所にお願いしなさい。ここには農林省も建設省の関係役所の人も来ていると思い

ます。私からもお願いしてあげます」と温かいお詞（ことば）をたまわり、関係者一同、安堵の声が上がった。

このようにきわめて爽やかな雰囲気の中に大観衆の感謝の声の中を木曽川をさかのぼり、八百津―丸山ダム予定地に到着。丸山ダム計画の一望できるところで、関西電力名古屋支店長石川栄次郎の工事計画の説明を聞かれ、本日の宿舎疏水館に御到着。木曽川疏水峡の一望できる部屋に落ちつかれ、山崎先生にねぎらいの言葉をたまわり、「山崎先生、あれでよろしかったですか」と微笑された。山崎先生は、「ありがとうございました。殿下のお徳によって、双方納得のいく決着がつきました」と御礼を申し上げられた。

高松宮の協力によって、その後できた犬山の取水口・合の頭首工。下流の人も喜んでくれた

やきものの里での一夜

第二日、翌十三日は、疏水館早朝出発、例のごとく浜島が御案内、殿下、山崎先生で、まず兼山の取り入れ口、兼山ダム満水面九四・五メートルから三メートル下九一・五メートルで取水、木曽川左岸を南下、伏見で可児川をサイフォンで渡り、帷子（かたびら）から岐阜、愛知県の県境をトンネルで越し、愛知県に入り、城東村から小牧、春日井市の高蔵寺サイフォン予定位置の見えるところで、加藤盡町長など東春日井郡の町長の歓迎昼食。

森林公園を通り水谷剣治の案内で瀬戸の赤津の作助家で御宿泊。小憩の後、茶室で抹茶を

いただくことになった。躙り口からはいっての茶室、礼式を知らぬ私のちょっと困ったなといったような顔をご覧になったのか、殿下がまず先に胡座をかいて、「こうして美味しくいただけばよいのだよ」と、お飲みになったので、安心した。本当に細かいところまで気をお配りになっていただけて感謝のほかなかった。続いて作助家代々の作品の展示してある部屋で、御当主のお婆さんの陶作と説明を聞かれて、「ここの御先祖様も変わった方が多いようですね。陛下は下手物がお好きで、いろいろ御話を聞きます。時に陶器と磁器がありますが、どう違うのかね」とお聞きになった。まわりにはそうそうたる人が多いので、どんなお答えが出るかと興味深くお答えを期待していたが、誰も黙っているので、つい、私が、「土の方の常識ですが、陶器は比較的アルミナの多い粘土で千度以下で焼成したものをいい、磁器は比較的珪酸の含量の多いカオリン系の粘土で千度以上で焼成し、珪酸など一部が溶けて硝石化しているものをいうと聞いております」と申し上げたら、「君、なかなか学があるんだね」とおほめいただいて、お笑いになった。

「これでよかったですね」と山崎先生、久野さんと談笑される高松宮
（浜島辰雄撮影）

第三日早朝、瀬戸赤津を出発。幡山村から長久手村に入り、長久手古戦場跡で合戦の模様を村の古老から御説明、興味深くお聞きになり、日進村中学校で、愛知郡町村長などと会食。愛知郡の農業事情を日進村村長が御説明申し上げ、東郷、豊明を通り、大府市の知北農場で氏原場長の畑地潅漑の御説明を興味深くお聞きになり、記

念撮影。大府の旧飛行場跡付近を通り、阿久比村、半田市有脇付近を通って亀崎の望州楼で御宿泊。森市長はじめ近傍町村長の歓迎にお応え下さった。

子八人を並べた〝皮肉な歓迎〟

第四日、半田特産のミツカン酢工場にお立ち寄り、師崎の浜の井戸を御覧になって、内海の榎本養鶏場に御到着。榎本誠場長は、自分と妻との間に長男忠一はじめ八人の子息を並べて歓迎、「榎本養鶏場は鶏も多産系でありますが、この親父も多産でありまして、私と妻との間の八人は、皆F[1]にございます」と申し上げ笑わせて場内を御案内。再び車に還ってこられて、笑いながら、殿下は「ここの親父は皮肉な親父だな。俺に子がないと思って、八人の子を並べて見せつけた」と言って、また笑われた。よほど御印象が深かったと見えて、その後、品川の御殿に参上した時に「あの皮肉な親父は元気か」とお尋ねになった。

内海の県試験場で昼食。野間の大坊で源義朝の最後の地を訪ね、常滑の伊奈製陶の本家に宿泊。常滑中の人が集まって大歓迎、常滑の楽焼作家の実演を見て常滑市長の歓迎の宴、いつもながら殿下のそばで盃洗がわりに呼ばれて座らせられた。

その日も山崎先生と殿下をまん中に置いて座らせられ、殿下は体温より低い飲み物は飲まれない。残ったものは、私の方に廻ってくる。考えてみると大変だ。飲み過ぎて途中で用便することなどはできない。

差された盃を受けぬわけにはいかない。帝王学というのか、大変な修練が必要だと、御一緒させていただいてつくづく感じた。

その日、滝田町長の紹介の折に久野さんが殿下の前で、「滝田町長はここの家の婿殿で、

知北農場で高松宮を囲んで記念撮影

北大農科出身の養鶏の大家であります。戦前、ドイツで養鶏の指導をして御活躍、とくに雛の雌雄鑑別が御得意で人気を博しておられましたが、第二次大戦が始まったため、惜しまれて帰国。現在は常滑市の人気市長、愛知用水には真っ先に賛成下さり、町村長会のまとめ役、大切な人です」と紹介申し上げた。

殿下は、「それは大変御苦労いただいたわけですね。愛知用水は国の復興にも大切な仕事です。どうか、しっかりとがんばって下さい。時に養鶏といえば、午前中に榎本さんの養鶏場を見せてもらったが、知多半島の養鶏は日本一だねえ。鶏といえば卵ということになりますが、卵には黄身と白身がありますが、白身より黄身がよい。一つの卵に黄身の二つ入っているのがありますが、黄身の二つ入った卵を産む鶏をふやす研究をしておりませんか」と御質問になった。さすがの滝田さんもお答えに困って、「卵には黄身が一つというのが常識でありまして」と次の言葉を考えている風。その時、山崎先生が、「殿下、日本の国では君は一つということになっております」と言われた。

「あ、そうだ。山崎先生には参った。君は一つだ」と、

さも愉快そうに笑われた。
その場に一瞬にして、爽やかな空気が流れた。山崎先生の本当の偉さを身に沁みて感じた。

陰で根回しした久野さん

第五日目。今日は最終日。ちょっとゆっくりできて、常滑の町長はじめ皆様の温かい御見送りの中、知多市では、先年御宿泊いただいた早川家の御見送り、久野家の挨拶もあり、知多半島とのお別れの千鳥橋付近に来た。
殿下が「大変楽しかった、ありがとう。ついに上衣を脱がなかったのは、君と山崎先生だったな。御苦労だった」とおほめいただいた。
そして、妃殿下のお迎えを受けて、丸栄ホテルにお送り申し上げて、ホッとした。
山崎先生も久野庄太郎さんも、さぞかし、ホッとしたことと思う。お陰で愛知用水完成と前後して、木曽川下流用水の合口取水堤が完成したことも殿下のお徳のたまものと感謝のほかはない。
これ以降、木曽川下流の用水とは必要に応じて協調して、大きなトラブルはなく愛知用水も着工へと進むことができた。
しかし、殿下の御案内にあたって、常に一歩先んじて、御巡行の先を行く、久野庄太郎さんの姿を見落としているが、その役柄も大変だ。さらに忘れてならないことは、その頃、愛知農林物産株式会社の預金通帳から百万円以上の預金が引き下ろされていたことを知る人は少ない。

（註1）石黒忠篤先生（一八八四～一九六〇）「農政の神様」との異名がある。明治・大正・昭和の三代にわたり、農本主義思想に貫かれた農政を展開。一九〇八（明治四一）年農商務省入省、三一（昭和六）年農林次官。四〇年に農林大臣、四五年に農商大臣、四三年貴族院勅選議員。戦後、五二年から参議院議員（緑風会）をつとめる。「石黒イズム」と言われた独特の農政は近代化農政路線がひかれた六〇年頃まで日本の農政に隠然たる力をもっていた。